

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00059

研究課題名(和文)後期インド仏教認識論におけるヨーガ行者の直観の研究

研究課題名(英文)A Study on Yogic Perception in Later Buddhist Epistemology

研究代表者

護山 真也(Moriyama, Shinya)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：60467199

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、プラジュニャーカラグプタの『認識論評釈莊嚴』(『認識論評釈』第3章第281～286偈への注釈箇所)とジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定』に関するテキスト校訂と訳注研究を通して、前者によれば、ヨーガ行者の直観における欺きのなさ は他の認識手段と齟齬をきたさないことを介して全知者論につながる要素があること、後者によれば、ヨーガ行者の直観の対象が独自相とされること背景には、アディヤヴァサーヤの働き、属性と属性保持者の無区別性、他者の観点の導入という三点があり、それらはダルマキールティとプラジュニャーカラグプタの議論に淵源があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまで十分な研究がなかったプラジュニャーカラグプタ著『認識論評釈莊嚴』「ヨーガ行者の直観」箇所およびジュニャーナシュリーミトラ著『ヨーガ行者の確定』のテキスト校訂・訳注研究を完成させたことにある。いずれも写本や関連資料の精査を踏まえた原典研究として今後の参照に耐える資料的価値をもつ。また、ヨーガ行者の直観は仏教に特有の知覚経験であり、その原典資料の公開は、宗教哲学・東西知覚論の比較考察に関心をもつ人々に役立つものとなる。

研究成果の概要(英文):This study, aimed at clarifying the role and significance of yogic perception in the Buddhist epistemological tradition, relies on the textual editions and annotated translations of Prajñakaraḡuṡṡa's Pramānavarttikāṡṡa (ad PV III 281-286) and Jñānasrimitra's Yoginirṡṡaya. (1) According to the former, the "non-belying" (samvādi=avisamvādi) of yogic perception is interpreted as "agreeing with other means of valid cognition" (pramānasamvādi) to show that yogic perception is likened to the Buddha's omniscience, which includes supersensible objects such as other existences in the transmigration, and (2) according to the latter, the fact that the object of yogic perception, like impermanence, is regarded as particular (svalakṡṡana) rather than universal should be understood from three elements, namely, adhyavasāya, the mental act of positing objects of action, the idea of non-distinction between property and property-possessor, and the acceptance of the perspective of others.

研究分野：インド仏教認識論

 キーワード：ダルマキールティ プラジュニャーカラグプタ ジュニャーナシュリーミトラ ヨーガ行者の直観 プ
ラマーナ 四聖諦 全知

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヨーガ行者の直観 (yogipratyakṣa) は、ダルマキールティ (7世紀頃) により大成された仏教認識論を特徴づける「解脱指向型の知覚論」を解明するための鍵概念であり、これまで内外の研究者により研究が重ねられてきた。

E・シュタインケルナーは「ヨーガ行者の直観が〈正しい認識の手段〉(プラマーナ) の定義を充足するのはなぜか」という問題を提起し、その解明のためにはジュニャーナシュリーミトラ (10-11世紀頃) の『ヨーガ行者の確定』(Yoginirṇaya) の参照が不可欠であることを指摘した (Steinkellner 1978)。同様の問題に対して岩田孝は、ダルマキールティの『認識論評釈』(Pramāṇavārttika) に対するプラジュニャーナカラグプタ (8-9世紀頃) の注釈『認識論評釈莊嚴』(Pramāṇavārttikāṅkāra) の発展的議論に注目すべきことを示した (岩田 1986, 1987)。

両者の研究により、仏教認識論におけるヨーガ行者の直観の議論を正確に理解するためには、プラジュニャーナカラグプタの『認識論評釈莊嚴』とジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定』という二つのテキストを文献実証的に解明する手続きが必要であることは衆目の一致するところであったが、その内容の難解さと写本をふくむ関連資料の不整備もあり、この研究に着手する者はしばらく現れなかった。

しかし2000年代に入ると、小野基、稲見正浩等の研究者の尽力により、『認識論評釈莊嚴』の文献研究の方法論が確立される。また『ヨーガ行者の確定』に関しても、トゥッチ・コレクシオンに収められた写本写真に基づく異読情報をまとめたE・フランコの論文 (Franco 2008) により、テキスト再校訂の道が開かれた。

このように二つのテキストを取り巻く状況が大きく変化するなか、英語圏ではJ・ダンが「ヨーガ行者の直観の対象が〈無常性〉などの普遍者であるにもかかわらず、独自相とされるのはなぜか」という本質的な問題を提起した (Dunne 2006)。ダンが提起した問題はダルマキールティの存在論・認識論・言語哲学・宗教哲学のすべてと密接に絡むものであり、それに満足のいく答えを与えるのは容易ではない。しかし、上記の二つのテキストの文献実証的研究が進めば、この問題に対する決定的な答えが与えられることが期待される。

2. 研究の目的

本研究は次の二点を目的とする。

- (1) 独自の発展的議論を含むプラジュニャーナカラグプタの『認識論評釈莊嚴』(『認識論評釈』第3章第281—286偈への注釈箇所、特に286偈に対する注釈箇所に発展的議論が含まれる) と、ジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定』に関する文献実証的なテキスト研究を基礎としながら、仏教認識論の体系におけるヨーガ行者の直観の位置づけを明確にすること。
- (2) 彼らの議論の哲学的意義を、現代の認知科学や現象学の議論との比較を通して明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) 校訂テキストの作成と訳註研究

- 『認識論評釈莊嚴』(S校訂本 pp. 326.21-331.9) のテキスト研究：先にMoriyama (2014) で確立した文献解読の方法に基づき、PVA 梵文写本を基礎資料として、チベット語訳、ジャヤンタ・ヤマーリによる復注およびラヴィグプタの注釈との比較対照を経て、梵・蔵文校訂テキストを作成する。また、作成した校訂テキストに基づく英訳注の作成も同時に行う。その際、オーストリア科学アカデミーのPatrick McAllister博士(専門：仏教言語哲学) と共同で国際ワークショップ Prajñākaragupta on yogic perception を開催 (2018年、ウィーン) を開催し、内容の検討を行う。また、ヤマーリ注梵文写本の研究を進めるライブチヒ大学を訪問し、テキスト校訂に関する意見交換を行う (2019年)。
 - 『ヨーガ行者の確定』のテキスト研究：ゲッティンゲン大学所蔵の梵文写本マイクロフィルムの確認とともに、G. Tucci コレクション所蔵の写本フィルムの情報およびラトナキールティの関連テキストとの比較対照を経て、テキスト校訂と和訳注研究を完成させる。その際、インド哲学全般に造詣の深い九州大学の片岡啓博士の助言を仰ぐため、九州大学で研究会を開催し、難解箇所の検討を行う (2020年)。
- (2) 哲学関係の研究者とのワークショップ等による学術交流と成果の発信
- 哲学の領域横断的な研究が行われる比較思想学会のシンポジウム (2018年) において比較思想の観点から見た仏教認識論の価値を討議する。その際、ヨーガ行者の直観も重要なトピックとなる。また、大正大学西洋哲学研究室研究会では現象学の専門家と「自己認識と主観性」をめぐる問題に関する提題と議論を行う。その他、日本印度学仏教学会や国際ダルマキールティ学会、国際ヤマーリ・ワークショップなどでの発表を通して、本研究の成果を発信し、他の研究者からのフィードバックを反映させていく。

4. 研究成果

- (1) テキスト研究の成果①：『認識論評釈莊嚴』のヨーガ行者の直観に関する箇所（PVA ad PV III 281-286）に関しては、国際ワークショップ **Prajñākaragupta on yogic perception** を開催（2018年7月、オーストリア科学アカデミー）を主催し、Patrick McAllister 博士の協力を得て、テキスト校訂と英訳を完成させた。注記を織り込んだ研究成果は、2023年3月発刊予定の『プラジュニャーカラグプタ研究』第3号に投稿予定である。
- (2) テキスト研究の成果②：ジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定』に関しては、九州大学で開催された研究会（2020年10月27-30日）の成果を受け、その第一部を『南アジア古典学』第16号（2021年）に公刊した。片岡啓氏（九州大学）からは貴重な助言をいただいた。この成果はまた、Francesco Sferra 氏（ナポリ東洋大学）から提供いただいた写本関連資料に基づくものである。その続編は同じく『南アジア古典学』第17号（2022年）・第18号（2023年）に投稿予定である。また、『ヨーガ行者の確定』の解題として、書誌情報・内容分析・引用テキスト一覧などをまとめたものを『インド哲学仏教学研究』第29号（2021年）に公刊した。このなかで、写本末尾に付された “yoginirṇayo nāma prakaraṇaṃ samāptam” の表記から校訂者（A. Thakur）は **Yoginirṇayaprakaraṇa** を本書のタイトルとして提示しているが、**prakaraṇa** はタイトルの一部ではないことを論じた。また、他論書からの引用、およびラトナキールティの『全知者証明』（SS）との並行箇所について、以下のようにまとめた。

YN	他論書からの引用	SS との平行箇所
Chapter 1 : ヨーガ行者の直観の対象となる実在と属性との関係 (323, 5-327, 7)		
323, 8-12		16, 13-16
323, 16-17		16, 16-18
323, 20-21		19, 24-26
324, 1-2	PV III 286	
326, 13-20	SS _J (Fragment 9, see Steinkellner 1977: 389)	
327, 5	PV II 131b (See Franco 2008: 158)	
Chapter 2 : ヨーガ行者の認識と感官知との関係 (327, 8-329, 27)		
327, 8-14		16, 19-26
327, 23-25		22, 27-30
328, 6-8		22, 31-23, 2
329, 1-6		23, 3-6
329, 4	PV III 530d	
Chapter 3 : 過去や未来の実在の認識をめぐる議論 (全てを知る全知者論) (330, 1-332, 13)		
330, 4-6		21, 23-26
330, 12	PVA v. 375cd	
330, 14-18		21, 26-31
330, 20-21	PV III 247b ₂ -d	
331, 1	PVSV 31, 23 (See Franco 2008: 158)	
331, 11-12	PV III 530b-d	22, 2-3
331, 15-23		22, 4-13
331, 21	PVA 113, 29-30	
331, 25	TS 3627a	
331, 26-332, 1		SS 22, 14
Chapter 4 : ヴァーチャスパティ・ミシュラからの批判への応答 (332, 14-337, 27)		
332, 14-16	NK 105, 8-9 (=NK _S 557, 5-7) Cf. AP 253, 22-23; Nakasuka 2019: 170, fn. 22	10, 26-28
333, 5-6	NK 106, 10-11 (=NK _S 561, 2-4)	17, 18-20
333, 10-12	NK 106, 12-13 (=NK _S 561, 4-7)	
335, 4-6	NK 106, 13-16 (=NK _S 561, 7-10)	12, 3-5
335, 14	NK 106, 16-18 (=NK _S 562, 1-3)	
336, 5-6	Cf. NK 106, 22-27 (=NK _S 563, 1-8)	

336, 11-19	NK 106, 31-107, 7 (=NK _s 564, 6-565, 5)	12, 20-28
337, 3-5	NK 108, 7-9 (=NK _s 568, 8-569, 2)	13, 26-14, 1
337, 7-8	NK 108, 16-17 (=NK _s 569, 12-13)	14, 9-10
Chapter 5 : トリローチャナからの批判への応答 (338, 1-341, 15)		
338, 2-5		14, 24-28
338, 6-9		20, 24-28 *This is not listed in Steinkellner 1977: 391, n. 7
339, 23-340, 3		15, 9-17
340, 4-5		15, 12-13
340, 14-15	PVA 85, 5 (v. II. 500)	
341, 3-5		15, 20-21
Chapter 6 : バーサルヴァジュニャからの批判への応答 (341, 16-342, 7)		
341, 16-17		21, 21-22
341, 18-19		21, 22-23
341, 19	NBhū 172, 14-15	
341, 24-342, 1	NBhū 173, 4-7	16, 8-11
Chapter 7 : スチャリタ・ミシュラからの反論への応答 (342, 8-343, 12)		
342, 13-14	ŚVK [ad pratyakṣa, v. 29] 218	10, 13-14; 17, 16-17

- (3) ヨーガ行者の直観と全知をめぐるプラジュニャーカラグプタの議論：ダルマキールティが『認識論評釈』のなかでヨーガ行者の直観について論じた PV III 286 には, *pramāṇam saṃvādi/pramāṇasaṃvādi* の読みの問題がある。フランコ氏は先行研究 (Franco 2011) でプラジュニャーカラグプタによるこの箇所のパラフレーズを根拠として、後者の読みを支持する議論を展開した。それに対して本研究では、プラジュニャーカラグプタはこの詩節を「中間偈」 (*antaraśloka*) すなわち、それ自体に注釈を加える必要のないものと見なしたことを明らかにした。このことは、当該詩節の後に付された長い議論は彼自身の自説であることを示す。そのなかで彼は「他の認識手段と齟齬をきたさない四聖諦や、他の認識手段と齟齬をきたさないであろう他世などの直観」をヨーガ行者の直観として規定する。ここに他世という超感覚的対象を織り込むことで、彼はヨーガ行者の直観がブッダの全知も包含するものであることを示している。プラジュニャーカラグプタの狙いは、ダルマキールティが PV I で提示した *avisamvāda* の二義のうち、検証レベルの *avisamvāda*——それは PV II では姿を消すが——を復活させ、他世などの超感覚的対象をふくむあらゆる事物を知る、ブッダの全知をヨーガ行者の直観の一種として提示することにあつたと言えよう。
- (4) プラジュニャーカラグプタの真理観：ヨーガ行者の直観の対象となる四諦について、ダルマキールティは『認識論評釈』「プラマーナの確立」章の後半部で詳細な議論を展開する。この四諦は、ダルマキールティがプラマーナの第二規定で与えた「未知対象を明らかにするもの」の未知対象 (*ajñātārtha*) に相当することは周知であるが、プラジュニャーカラグプタは必ずしもその理解に従わない。彼は「未知対象」を「不二知」 (*advayajñāna*) として解釈し、四諦の解説にもその観点を導入する。本研究では「プラマーナの確立」章注釈におけるプラジュニャーカラグプタの不二知とそれに関連する用法を検討し、特に第 139 偈に登場する *yukti* を不二知と解する点に特色があることを指摘した。すなわち、*yukti* とは事物の相互結合を意味し、法無我を含意する。この点を前提とすることで、続く 146 偈前半部の注釈で、「たとえ *yukti*, すなわち法無我を欠いたものであるにせよ、ブッダによる四諦の教説は欲望を鎮める効用がある」と述べられたことの意味が明瞭になる。プラジュニャーカラグプタにとって、不二知こそが四諦よりも上位に置かれるものであり、この点が勝義のプラマーナ／世俗のプラマーナの峻別にも影響を与えている。
- (5) ヨーガ行者の直観の対象が独自相となる理由：ジュニャーナシュリーミトラの『ヨーガ行者の確定』では、ヴァーチャスパティ・ミシュラおよびトリローチャナといった対論者からヨーガ行者の直観の対象は瞑想 (*bhāvanā*) の対象である共通相であり、独自相とはならないことが問題とされる。この問題に対するジュニャーナシュリーミトラの回答は、①〈アディヤヴァサーヤ〉 (*adhyavasāya*) と呼ばれる認識の働き、②属性と属性保持者との無区別性、③他者の観点 (*anyāpekṣā*) の導入、という三点にまとめることができる。このうち、①と②の視点はダルマキールティにそのアイデアの淵源があり、③はプラジュニャーカラグプタの議論に淵源がある。①②の観点に密接に関連するのは、PV III 102-109 の議論で

ある。その分析より、独自相とは無常性などの諸属性と本来的に不可分の存在であるが、一般の人々は瞑想の力を欠いているために、その属性を確知することができない。そのため推論の力により無常性などを知るしかない。一方、ヨーガ行者は瞑想の力により、直観という形で個々の事物（刹那的なもの）と不可分な無常性などを確知することができる。現代哲学の用語を使えば、ヨーガ行者の直観の対象となる無常性は単なる普遍ではなく、個別化した普遍（トロープ）に類したものであり、それは個物（独自相）と不可分のものである。この PV III 107cd はヴァーチャスパティにより引用されることから、ヨーガ行者の直観に関する重要な記述であることが知られる。そこで言う「確知」(vyava-√so) は、プラジュニャーカラグプタにより〈アディヤヴァサーヤ〉と注釈される。すなわち、ヨーガ行者は〈アディヤヴァサーヤ〉の働きにより、知に映じる〈無常性〉などの共通相に重ねて、行為対象となる〈無常なもの〉を措定する。これがヨーガ行者の直観の対象が独自相となる理由である。一方、③に関しては、ヨーガ行者による過去や未来のものの認識では「他者の観点から」その本来の時間とは異なる時間が措定される、と述べたプラジュニャーカラグプタの議論が下敷きとなる。ジュニャーナシュリーミトラは、ヨーガ行者が五蘊を直観していることに違いはないが、「他者の観点により」その五蘊を苦の原因（集諦）の四相としても捉える、と言う。これはさきほどとは逆に、五蘊という独自相を捉えておきながら、「他者の観点から」それを共通相として捉える場合を述べたものである。本研究の当初の問題意識に対する上記の答えに関しては、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのために延期となっていた国際ダルマキールティ学会（2022年8月）で発表予定である。

- (6) 最後に、ヨーガ行者の直観をふくむ、ダルマキールティの知覚論を現象学や分析哲学の議論と比較した成果として『仏教哲学序説』（ぶねうま舎、2021年）を上梓した。そこで提示した三つの視点は、本科研の成果を反映したものである。すなわち、仏教認識論に対する比較思想的アプローチにおいては、①術語や概念の翻訳の場面で、西洋思想の関連術語との比較・対照を重ねて精査すること、②議論や論証のレベルで、二つの異なる思想体系の差を見極めること、③哲学と宗教との関係をめぐる二つの伝統を比較し、広い射程で分的背景の差異を見極めること、という三つの視点が重要であることを指摘した。ヨーガ行者の直観に関して言えば、芸術的直観を扱う現象学やエナクティブ主義の哲学などとの比較に有望な未来があるものと思われるが、それは今後の課題として残された。

<引用文献>

- Dunne, John (2006): “Realizing the unreal: Dharmakīrti’s theory of yogic perception,” *Journal of Indian Philosophy* 34.
- Franco, Eli (2008): “Variant Readings from Tucci’s Photographs of the *Yoginirṇayaprakaraṇa* Manuscript,” in F. Sferia (ed.), *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection Part I*, Roma.
- Franco, Eli (2011): “Perception of yogis – Some epistemological and metaphysical considerations,” in: H. Krasser et al. (eds.), *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis*. Wien.
- 岩田孝 Iwata, Takashi (1986): 「Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知の無錯乱性証明の一視点」『印度学仏教学研究』35-1.
- 岩田孝 (1987): 「ヨーガ行者の知の整合性について」峰島旭雄編『比較思想の世界』北樹出版.
- Moriyama, Shinya (2014): *Omniscience and Religious Authority*. Berlin: LIT Verlag.
- 中須賀美幸 Nakasuka Miyuki (2019): 「grāhya/adhyavaseya 再考—成立の背景と史的展開—」『インド学チベット学研究』23: 145-208.
- Steinkellner, Ernst (1978): “Yogische Erkenntnis als Problem im Buddhism,” in G. Oberhammer (ed.), *Transzendenz- erfahrung, Vollzugshorizont des Heils*, Wien.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 護山真也	4. 巻 9-1
2. 論文標題 ブラジュニャーカラグプタの苦諦論(1) Pramanavarttikalankara ad Pramanavarttika II 146cd-149和訳研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 47-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 護山真也	4. 巻 16
2. 論文標題 ジュニャーナシュリーミトラ著『ヨーガ行者の確定』和訳研究(上)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 247-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 護山真也	4. 巻 70-1
2. 論文標題 ブラジュニャーカラグプタの真理観 四諦と不二知をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度哲学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Shinya Moriyama	4. 巻 2
2. 論文標題 Prajnakaragupta's Criticism of the Proof of God's Existence (II)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Prajnakaragupta Studies	6. 最初と最後の頁 139-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 29
2. 論文標題 ヨーガ行者の直観をめぐるジュニャーナシュリーミトラの議論 『ヨーガ行者の確定』 解題にかえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 インド哲学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinya Moriyama	4. 巻 1
2. 論文標題 Prajnakaragupta 's Criticism of the Proof of God 's Existence (I) A Critical Edition and an Annotated Translation of the Pramanavarttikalankara ad Pramanavarttika II 11-16	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Prajnakaragupta Studies	6. 最初と最後の頁 75-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50869/prajnakaragupta.1.0_75	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 1
2. 論文標題 仏教認識論の射程－未来原因説と逆向き因果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 未来哲学	6. 最初と最後の頁 138-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinya Moriyama	4. 巻 -
2. 論文標題 Dharmapala on the Cognition of Other Minds (paracittajnana)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Buddhist Philosophy of Consciousness: Tradition and Dialogues (Brill) Ed. Mark Siderits, et al.	6. 最初と最後の頁 225-241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 -
2. 論文標題 ブラマーナ・ヴァールツェィカ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 斎藤明他（編）『仏典解題事典』（春秋社）	6. 最初と最後の頁 198-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 44
2. 論文標題 自己認識（svasamvedana）と主観性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 137-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 67-2
2. 論文標題 ヨーガ行者の直観と全知をめぐるブラジュニャーカラグプタの議論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 150-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 46-16
2. 論文標題 仏教哲学の可能性 無我説をめぐる西洋哲学との対話	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 138-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 護山真也	4. 巻 45
2. 論文標題 比較思想から見た仏教認識論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 Dharmapala and Dharmakirti on the Refutation of a Proof of the Sankhya Dualism
3. 学会等名 Workshop: Reading Dharmapala and Bhaviveka (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 護山真也
2. 発表標題 プラジュニャーカラグプタの真理観 四諦と不二知をめぐって
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 護山真也
2. 発表標題 自己認識 (svasamvedana) と主観性
3. 学会等名 科学における意識の問題への現象学的・唯識思想的アプローチとその現代的課題について (大正大学西洋哲学研究室研究会) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 Yamari on Two Levels of Pramana: The Omniscient Buddha and the Ordinary Means of Valid Cognition
3. 学会等名 International Workshop: Prajnakaragupta and Yamari. University of Leipzig. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 Prajnakaragupta and Jnanasrimitra on the reliability of yogic perception
3. 学会等名 Jagiellonian University (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 Prajnakaragupta and Jnanasrimitra on the reliability of yogic perception
3. 学会等名 International Symposium: Philology, Philosophy and the History of Buddhism. University of Vienna. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 護山真也
2. 発表標題 比較思想としての仏教認識論
3. 学会等名 比較思想学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 Hallucination, yogic perception, and omniscience
3. 学会等名 International Workshop: Prajnakaragupta on yogic perception
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 護山真也
2. 発表標題 ヨーガ行者の直観と全知をめぐるプラジュニャーカラグプタの議論
3. 学会等名 第29回西日本インド学仏教学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 護山真也
2. 発表標題 ヨーガ行者の直観と全知をめぐるプラジュニャーカラグプタの議論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinya Moriyama
2. 発表標題 An analysis of svalaksana in Dharmakirti's philosophy
3. 学会等名 International Workshop on Buddhist Ontology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 護山真也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ぶねうま舎	5. 総ページ数 268
3. 書名 仏教哲学序説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

見えないものを見ようとする修行者の思考をたどる https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/12488/ クラクフからウィーンへ https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2019/12/136947.php
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------